

(8) 「グローバル国語」について

<目標>

「国語総合」の授業で重視されている「読む」「書く」の言語活動に加えて「話す」「聞く」の実践的な活動を行うことによって、自分の意見を論理に基づいて他者に説明する過程で、言語感覚を磨き、分析力や状況に応じた判断力を身につけさせる。また、他者との対話を通して、物事を多面的に見る力と、多様性を受容し協働して問題を解決する力を育む。

<身につけさせたい力>

- ア 「話す・聞く」の領域に特化した言語活動を行うことで、効果的な話し方や聞き方を体験的に学ばせ、自分とは異なる考えを持つ他者の意見を踏まえながら、コミュニケーションする力を身につけさせる。
- イ 課題ごとにペアやグループといった学習形態を設定し、他者と協力しながら課題解決に向け活動する機会を設け、他者と協働する力や課題解決能力を身につけさせる。
- ウ 与えられたテーマについて資料を用いて調べ、根拠を持って意見を形成することで、論理的に判断し表現する力を身につけさせる。

<昨年度末に挙げられていた課題>

国語総合の現代文分野とグローバル国語との連携のみならず、古典分野も含めた連携、および国語以外の科目との連携も視野に入れるべきではないだろうか。

<当初の計画の概要>

概ね昨年度の計画を踏襲することを想定しつつも、昨年度末に挙げられていた課題を踏まえて計画をたてた。\*傍線部は、昨年度から変更を加えた箇所。

- 1 学期…今後の学習の流れを説明する。また、効果的な「話し方」や「聞き方」を学ぶ講座を設定する。与えられたテーマについて、現代社会の教科書や資料を用いて調べ、自分なりの意見を形成させる。（これは、昨年度末の課題として挙げられていた教科横断的な学びの創出。を踏まえての計画である。）国語総合現代文分野の「羅生門」での学びを踏まえ、本格的なディベートの簡易版であるマイクロディベートを体験させることを通して、根拠を持って意見を述べることを学ばせる。（2学期に行うディベートの予行演習として設定した。）
- 2 学期…1学期の学習を踏まえ、ビブリオバトルやディベートといった実践的な学びによって、効果的に話すこと、論理的に考えること、課題解決に向け他者と協働して活動するあり方を学ばせる。特に、ディベートでは、教科横断的な課題を取り上げる。
- 3 学期…百人一首から好きな和歌を選び、自分の選んだ和歌の良さを、グループでプレゼンテーションするという活動をさせる。（これは、昨年度末の課題として挙がっていた、国語総合の現代文分野とグローバル国語との連携のみならず、古典分野も含めた連携を図ることをねらいとして設定した）。また、1、2学期の学びで培ったことを「書く」という活動と結びつけることで、1年の学びを振り返らせるとともに、学んだことを整理させる。

<修正した計画の概要> \*傍線部は、緊急事態宣言等の影響で変更を加えた箇所

- 1 学期…今後の流れを説明する。自己紹介文を作成する活動を通して、効果的な「話し方」について各自で考えをまとめさせる。また、与えられたテーマについて、現代社会の教科書や資料を用いて調べ、自分なりの意見を形成させる。国語総合現代文分野「羅生門」での学びを生かし「生きるために犯す悪は容認される」というテーマでマイクロディベートを行う。昨年度1学期に実施した平田オリザ先生による、コミュニケーションのあり方をテーマに

した講演は、3学期に延期する。

2学期…1学期の学習を踏まえつつも、様々な情報を収集・選択・活用して客観的に考察し論理的に表現する力や、自分とは異なる意見を想定して、それに対して自己の正当性を立証する技術を身につけさせる。その方途として、ビブリオバトルやディベートを学習活動に取り入れる。1学期は自分の思いを表現し、わかりやすく他者に伝えることを中心に考えさせるが、2学期はそこから発展して、自分の考えを効果的に表現する方法や、自分の立場の正当性を論理的に示すことを目標とさせる。

3学期…百人一首から好きな和歌を選び、自分の選んだ和歌のよさを、グループでプレゼンテーションさせる活動を行い、グローバル国語と国語総合古典分野との連携を図る。さらに、1、2学期での学びで培ったことを「書く」という活動と結びつけることで、1年の学びを振り返らせるとともに、学んだことを整理させる。具体的な活動としては、2学期で取り上げたディベートでのテーマによって600字から800字程度の小論文を書かせる活動を行う。また、平田オリザ先生の講演からコミュニケーションについて学ばせる。

#### <実施内容および方法>

1 単位の授業を各学期とも、ある時期に固めて実施した。

[1学期] …以下の①～③の活動を行った。なお、①②に関しては、在宅教育期間中の課題として生徒に課した。

①在宅教育期間中に、2分程度で級友に自己紹介を行うことを想定した自己紹介文を書かせた。その際、どんな点を工夫して自己をアピールするとよいかも考えさせて、ノートに記述させた。

②夏期休業後に JICA 募集の作文に応募させることを踏まえ、現代社会の教科書の第1章からテーマをいくつか設定し、自分の興味のあるテーマについて教科書や新聞記事、インターネットを活用した調査を行わせ、調べたことをワークシートに記述させた。なお、設定したテーマは、「ア 地球の環境問題」、「イ 資源・エネルギー問題」、「ウ 科学技術の発達と生命」、「エ 高度情報化社会と生活」、「オ その他（自分で設定したテーマ）」の5つである。

③国語総合現代文分野で学習した「羅生門」の内容を踏まえ、「生きるために犯す悪は容認される」というテーマでマイクロディベートを行った。

[2学期] …以下の①②の活動を行った。

①夏期休業中に読んだ本などを級友に紹介する、ビブリオバトルを3時間配当で行った。第1時は、ビブリオバトルについての説明と、教育実習生による実演、評価基準の提示を行った。その後、ワークシートに必要事項を記入させることでビブリオバトルの準備をさせた。第2時は、グループ内発表（予選）に1時間、各グループの代表者によるクラス全体での発表（本選）に1時間を配当し、チャンプ本を生徒に選ばせた。第2・3時には評価シートを配布して記入させるとともに、振り返りをさせた。

②ディベートを7時間配当で行った。ディベートにおけるテーマは、「消費税の引き上げは妥当である」「死刑は刑罰として容認すべきだ」「脳死は人の死と見なすべきである」の3テーマとし、肯定派・否定派に分かれて活動させた。第1時は、ディベートの説明を行い、生徒たちにはグループ分けとグループでの打ち合わせをさせた。第2～3時は、ディベートの立論に必要な資料の検索などの調べ学習をさせた。資料として用意したものは以下の通り。小論文の副教材、現代社会の資料集、本校の図書室の蔵書、奈良県立図書情報館と橿原市立図書館より借用した書物である。また、各グループに1台ずつPCを貸し出し、インターネット検索もさせた。第

4時～5時は教室において、調べたことを用いて立論・反駁の準備をさせた。第6～7時にディベートを実施。7時の後半に、振り返りをノートに書かせるとともに、ルーブリックを示し、自己評価を行なわせた。

[3学期] …以下の①②③の活動を行った。

- ①百人一首から好きな和歌を3首選び、それらの和歌について調べるという課題を冬期休業中に課したうえで、「私の選んだ一首」という題で、グループでプレゼンテーションをさせた。
- ②2学期のディベートで取り上げたテーマについて、根拠を示しながら自分の意見を600字～800字程度の文章にまとめさせた。説得力のある文章を書くため、小論文を書く手順や書き方の一例を示すとともに、ルーブリックも示し、構成や論理性を評価の主眼とすることを明示した。
- ③講師に平田オリザ先生を招聘し、よりよいコミュニケーションのあり方について講演やワークショップを行っていただいた。今年度は、感染症予防の観点から代表生徒がステージ上でワークショップに参加するという形式がとられた。ワークショップによって、生徒たちは、自分が前提としていることと、他者が前提としていることは、文化や体験、置かれている立場や状況によって異なっているということを身をもって感じたようである。また、現代社会では、情報を組み合わせて他者と協働しながら課題を解決することが求められていることについて、わかりやすく講演していただいた。講演を通して、生徒たちは、課題研究の意義をよく理解したようである。

〈授業アンケートについて〉

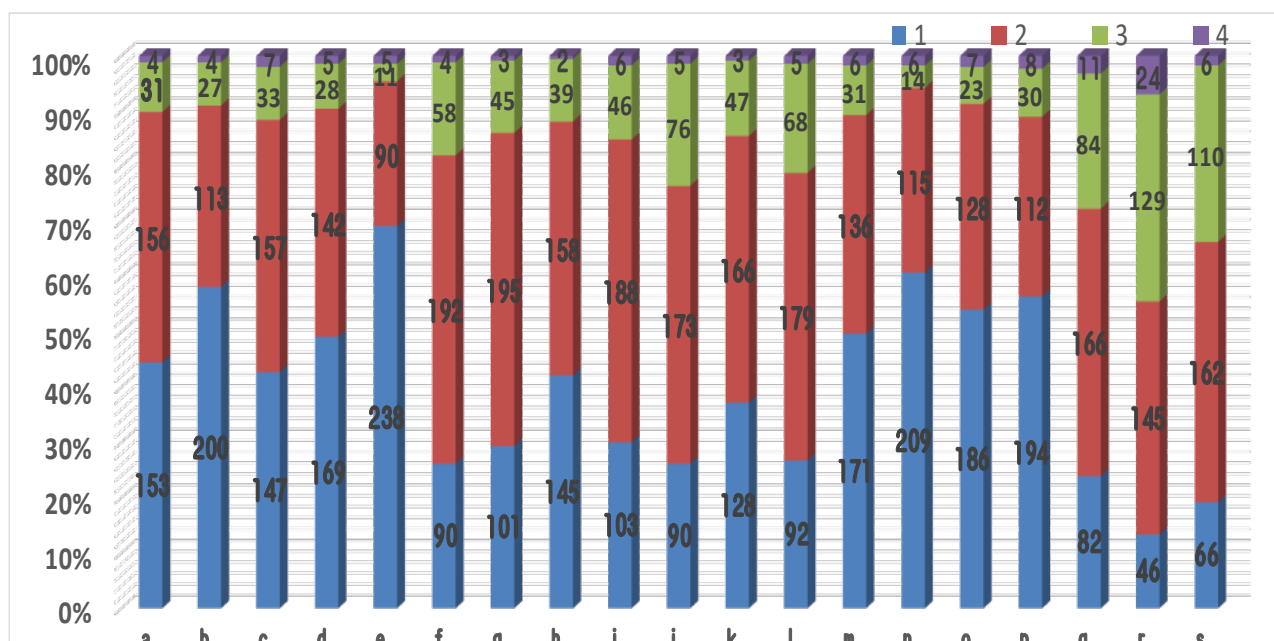
グローバル国語の授業について、授業を受けた第1学年の生徒（回答数344）を対象にアンケート調査を行った。調査の目的は、学びの到達度を生徒に自己評価させるとともに、本年度の成果と課題を探る一つの資料とするためである。アンケートは、a～sの項目について、「1 そう思う」「2 まあそう思う」「3 あまり思わない」「4 思わない」のいずれかを選択させるという方法で行った。なお、アンケートの調査項目と調査結果は以下の通りである。

### 3学期実施 グローバル国語の授業アンケート調査項目（昨年度に準ずる）

〈意欲〉	a 積極的に参加した
	b 楽しかった
	c 達成感を感じた
〈位置づけ〉	d 高校生活や他の授業に役立つ授業内容だと思う
	e 将来の社会生活に役立つ授業内容だと思う
〈論理的思考力・技能〉	f 根拠を示して自分の意見を伝えられるようになった
	g 相手が言いたいことを正確に聞き取ることができるようになった
	h 情報を収集する力が身についた
	i 情報を取捨選択する力が身についた
	j 情報を分析する力が身についた
	k 物事をいろいろな視点で見られる（考えられる）ようになった
	l 物事を論理的に考えられるようになった
	m 物事をメリットとデメリットの両面から考えられるようになった
〈他者と協働できる力〉	n 他者の意見を受け入れられるようになった
	o 他者と協力して問題を解決することができるようになった
	p 他者と協力して問題を解決する意義を実感できた
〈対話力・伝達力〉	q コミュニケーション能力が高まったと感じる
	r 人前で話すことに抵抗感がなくなった
	s 表情や音量、速度、構成などを工夫して話せるようになった

施 グローバル国語の授業アンケートの結果（回答数344）

「1 そう思う」「2 まあそう思う」「3 あまり思わない」「4 思わない」



<成果と課題>

昨年度の実践内容を踏まえつつも、適宜内容を精選することで、今年度の状況に対応しながら学習指導を行った。今年度の取組の成果と課題を以下にまとめる。まず、「身につけさせたい力」の育成について検証したい。

ア「他者の意見を踏まえながら、コミュニケーションする力」について

アンケート項目と身につけさせたい力は一対一对応ではないが、アンケート項目のk、gならびにq～sの結果を見ても、生徒が他者の意見を踏まえてコミュニケーションする力が向上したと認識していることがわかる。昨年度、1学期に実施されていた「他己紹介」、国語総合と関連させた「1分間スピーチ」は、「自己紹介文を書く」という形に集約したものの、2学期は「ビブリオバトル」、「ディベート」、3学期は、自分の好きな「百人一首の和歌」をプレゼンテーションによって紹介するという活動、平田オリザ先生からコミュニケーションのあり方を学ぶ機会を設定し、概ね昨年度並みの活動機会を設けた。その成果であろうか、自分以外の他者と交流することで、自己理解や他者理解が進んだと述懐する生徒が増えた。各活動の振り返りをする機会には、生徒同士が相互に評価した結果をノートに記録させていたが、そうしたことを通して、級友の得意なことや興味関心のある分野、人となりへの理解が進んだことがうかがわれる。「他者の意見を踏まえながら、コミュニケーションする力」の育成をめざすことを通して、同時に生徒の自己理解・他者理解が進み、自分とは異なる意見を踏まえる、相手の立場に配慮して発言する、反論するときには建設的な提案などを加える等のことができるようになった生徒が増えたことは大きな成果である。今後の課題としては、定型的な発表の仕方を越えて、聞き手にとって興味深い話し方、発表のあり方を模索させることや、聞き手としてどのような聞き方が望ましいのかも考えさせる必要があるだろう。

イ「他者と協働する力」「課題解決能力」について

本年度は4月～6月中旬まで、クラス全員が揃った通常の授業を行うことが出来なかった。そのため入学間もない時期から、在宅教育期間に入った1年生の生徒たちが級友等とどのよう

に協働していけるのか、その機会をどのように設けていくのかについて苦心したが、ペアやグループによる学習形態、クラス発表やプレゼンテーションの機会を、グローバル国語の時間のみならず、現代文での学習【図16】、古典での学習において設けたことで、「他者と協働する力」「課題解決能力」が培われたと思われる。それは、アンケートのn～pの質問項目への回答結果からも言えそうである。

#### ウ「論理的に判断し、表現する力」について

現代社会の教科書を活用した「現代社会の課題を考える」という在宅教育期間中の課題、2学期の「ディベート」から3学期の「小論文」を書く学習活動へと取組を繋げるなかで、生徒の成長が見られた。これらの活動では「課題について文献等で調べる→考えをまとめる→他者と交流して考えを深める→書く活動によってまとめる」の流れを意識した。こうした取組の成果の一端として、3学期に小論文を書き終えた生徒たちから、「根拠を示して意見を書く書き方がわかった」、「読書感想文を書くよりも意見文のほうが書きやすかった」、「書き方の例があるのでわかりやすかった」、「書くことに備えて家でじっくり考えてきた」、「(小論文の仕上がり)に自信があります」等の前向きなコメントが多く寄せられたことが挙げられる。小論文を書かせるに当たって、事前にルーブリックを示し、評価項目を明確にしておいたことも良かったのではないと思われる。ディベートという活動のなかで、データや根拠を明確に示すトレーニングを行った成果だと思われるが、出席していた全ての生徒が時間内(40分)に600字から800字の意見文を書き上げた。意見文では自分の意見や考えとともに、そのように考える2～3の根拠を示し、自分の意見に対する反論にも応ずるように書いていた。4月当初に書かれた、たどたどしい自己紹介文からすると、大きく成長した生徒の姿が伺われる。その一方で、小論文を書くときに考えた論理構成や、書き方を、教科書掲載の評論等を読むときの方略として転用できる生徒は非常に少なく、「書く」とことと「読む」ことが、生徒にとっては、容易には繋がらないといった実体がかがわれる。今後の課題として、グローバル国語で培ったことを、「読む」ことや「書く」ことにどう繋げていくのかも検討していきたい。

#### <まとめ>

これまで述べてきたように、取組の過程においていくつかの課題が見えてきた。それは、生徒たちに情報の真偽をどのように見分けさせるのか、得られた情報を活用し分析する力をどのように育成していくのか、定型的な発表の仕方を越えて、聞き手にとって興味深い話し方や発表のあり方、聞き手としての聞き方をどのように身につけさせるのか、また、グローバル国語での学びを「読む」ことや「書く」こととどう関連づけていくのか、等である。

このようにいくつかの課題が残されているものの、この一年間の取組を通して、生徒の自己理解、他者理解が進むとともに、身につけさせたい力を概ね育成できたことは、大きな成果であったと思われる。感染症対策と並行しながらの活動に難しさはつきものであるが、そうした困難な時節であるからこそ、この取組の意義は大きかったと考える。